

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 24 年 6 月 11 日現在

機関番号：24402

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009 年度 ～ 2011 年度

課題番号：21659534

研究課題名（和文）児童虐待予防をめざした性教育・小学生親子講座プログラム開発に関する研究

研究課題名（英文）Development of a sex education program designed to prevent child abuse for elementary school children and their parents

研究代表者

横山 美江 (Yokoyama Yoshie)

大阪市立大学・大学院看護学研究科・教授

研究者番号：50197688

研究成果の概要（和文）：本研究では、西宮市保健所の協力のもと、小学生とその保護者を対象に、児童虐待予防をめざした性教育プログラムを開発し、その有効性について検証した。性教育プログラムを実施直後では、性教育および自己の大切さに対する児童らの思いが、プログラム実施前よりも実施直後で有意に大切であるという気持ちが強くなっていた。しかしながら、実施3か月から6か月後に同じ調査を実施したところ実施前との差は認められなかった。これらのことから、性教育プログラムは、1 回のみの実施ではなく、継続的に実施する必要性があることが示された。

研究成果の概要（英文）：The number of complaints of and consultations for child abuse has been increasing annually in Japan, and victims of sexual abuse, in particular, are seriously affected by such incidents. In most sexual abuse cases, perpetrators and victims are acquainted, making the victims feel helpless, guilty, despicable, or confused about their sexuality. It has been reported that these feelings and confusion can escalate into problematic behaviors. To prevent such suffering and a domino effect of damage from occurring, children need to acquire appropriate knowledge on sexuality from an early age. This knowledge can help them develop self-esteem and abilities to protect their own health and to prevent themselves from becoming victims of sexual abuse. With the cooperation of Nishinomiya City Public Health Center, this study developed and examined the effects of a sex education program designed to prevent child abuse for elementary school children and their parents residing in the area. The program included learning basic sexual knowledge (on boy's and girl's sexuality), the process from ovulation until conception, fetal development in the womb, childbirth, and simulation of a pregnant woman. During the program, the children and their parents also discussed the parents' feelings at the time of the children's birth. The children's beliefs in the importance of sex education and self-esteem were significantly higher immediately after completion of the program compared to those before the program. However, the same evaluation conducted six months after the program showed no differences in the children's beliefs. These findings suggest that the sex education program is beneficial and should be conducted at regular intervals.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	0	900,000
2010年度	1,100,000	0	1,100,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	270,000	3,170,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学 地域・老年看護学

キーワード：児童虐待、性教育、母親、虐待認識

1. 研究開始当初の背景

児童虐待の相談件数は、わが国においても年々増加しており、なかでも性的虐待は被害者に深刻な影響を及ぼしている。性的虐待では、その加害者のほとんどが顔見知りであるため、被害者に無力感、自責の念、自己嫌悪感、あるいはセクシュアリティの混乱を招き、さらには、ひきこもり、うつ状態、拒食・過食、自傷行為、動物や年少の子どもへの暴力行為へとエスカレートさせる危険性があることが報告されている。このような被害ならびに被害の連鎖を未然に防ぐためには、幼い頃から性に関する正しい知識を身につけ、子ども自身の自尊感情や自身で健康を守る力(性感染症の予防を含む)、および性的虐待を予防する力を育むことが重要であると考えられた。

2. 研究の目的

本研究では、西宮市保健所の協力のもと、当該地域に在住する小学生とその保護者、および中学生を対象に、児童虐待予防をめざした性教育プログラムを開発し、その有効性について実証的データに基づき検証することを目的とした。加えて、虐待予防の基礎的資料とするために、母親の虐待認識についても調査し、分析を加えた。

3. 研究の方法

1) 小学生に対する調査

本研究では、西宮市に在住する小学4年生の児童103名とその保護者を対象に性教育プログラムを開発した。さらに、プログラムに参加した児童への効果を検討するための調査を性教育実施前、実施直後に実施し、さらに約6ヶ月後に追跡調査を実施し、性教育プログラムの効果を分析した。

2) 中学生に対する調査

中学2年生の生徒171名を対象に思春期性教育を行った。性教育実施前と実施から3ヶ月後に無記名式質問用紙による質問紙

調査を実施した。担任が質問用紙を配布し、結果は統計的に処理しプライバシーは守られること説明し、回答用紙は学級ごとに封筒に入れて回収した。調査内容は自尊心、友人・家族への感情、親や友人との性についての話し合い、異性との交際、性に関する悩み、性行為に対する考え、性教育の評価、性へのイメージ、性について知りたい情報などである。

3) 母親への虐待認識に関する調査

対象者は、西宮市の4か月児健診を受診した母親のうち、無作為抽出した3,000人の母親に自記式質問紙を郵送し、1,725人(回収率57.5%)から回答を得た。このうち、第1子が12歳以下である母親1,471人を本研究の対象者とした。本研究では、子どもを虐待しているのではないかと思うことがあるか否かを二件法で問い、その内容について調査した。分析に使用したデータは、子どもの年齢、子どもの数、母親の体調、ストレス解消法の有無、自由時間の有無、睡眠状態、育児協力者の有無、母親の不安状態、抑うつ状態、可愛がりにくい子どもがいるか否か等である。

4. 研究成果

1) 小学生に対する調査結果

本研究の趣旨説明に同意の得られた小学生とその保護者を対象に、開発した性教育プログラムを実施した。性教育プログラムは、性の基礎知識(男の子の性に関する知識、女の子の性に関する知識)、排卵から受精までの過程と胎児の子宮内での成長過程、分娩に関する知識、出産時の親の想いを親から聞く体験、模擬妊婦体験に関する項目を盛り込んだ内容である。性教育プログラム実施前、実施後、および実施6ヶ月後の児童の性に関する認識の変化について、フォローアップ調査を実施した。その結果、性教育プログラムを実施直後では、性教育、

および自分の大切さに対する児童らの思いが、プログラム実施前よりも実施直後で有意($p < 0.01$)に大切であるという気持ちが高くなっていった。しかしながら、6ヶ月後と同じ調査を実施したところ実施前との差は認められなかった。これらのことから、性教育プログラムは、1回のみの実施ではなく、継続的に実施する必要があることが示唆された。

2) 中学生に対する調査結果

「自分を大切にできるように人を大切にす

る」という内容を多く盛込んだ性教育を実施した。性教育実施前調査では167人(男子77人、女子90人、回答率97.7%)から回答が得られ、実施3ヶ月後調査では164人(男子78人、女子86人、回答率95.9%)から回答を得た。親と性について話し合うと回答した者は、性教育実施前調査では24.7%であったのに対し、性教育実施3ヶ月後調査では43.8%が親と性について話し合うと回答しており、実施3ヶ月後調査において親と性について話し合う者の割合が有意($p < 0.001$)に高くなっていった。一方、「性行為に対する考え」に関しては、「相手を思いやる気持ちが大切」と回答した生徒が女子では、性教育実施前では15.9%であったのに対し、性教育実施後では43.0%と、有意($p < 0.001$)に性教育実施後で高くなっていった。男子においては、有意な差は認められなかった。

本研究結果より、自分と同じように人を大切にするという内容を多く盛込んだ性教育では、性教育実施後に「相手を思いやる気持ち」をもつ生徒が多くなることが明らかとなった。また、親と性について話し合う機会も増加しており、性教育が有効であることが示された。

3) 母親への虐待認識に関する調査

調査時点で、虐待認識のある母親は333人(全体の22.6%)であった。虐待認識の内容は、各年齢を通じて感情的な言葉が最も多く、続いて叩くなどの行為が挙げられていた(表1)。母親の虐待認識は子どもの年齢階級で差異が認められ、1歳以下の子どもをもつ母親では虐待認識のある者の割合が13.8%と、他の年齢の子どもをもつ母親よりも有意($P < 0.001$)に低かった。ロジスティック回帰分析の結果、母親の虐待認識には可愛がりにくい子どもがいること、子どもが2人以上いること、STAIにおける特性不安が高不安であること、母親の体調が悪いもしくは治療中であること、および障がい児をかかえていることと関連が認められた。可愛がりにくい子どもがいる理由で最も多く挙げられていたものは、下の

子どもがいる場合の上の子どもへの対応の難しさであった。

本研究結果から、対象者全体の22.6%の母親に虐待認識が認められた。これらの母親は、子どもに対して感情的な言葉、叩くなどの行為を認知していることが確認された。また、母親の虐待認識は、子どもの年齢と関連しており、2歳以上の子どもをもつ母親で有意に多くなっていった。さらに、子どもが複数いる母親に、虐待認識のある者が多いことが示され、初妊産婦が優先されやすい現在の母子保健サービスのあり方や優先順位を虐待予防の視点から再度検討する必要性が示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1件)

- ① 横山美江、岡崎綾乃、杉本昌子他：乳児から小学生の子どもをもつ母親の虐待認識についての検討、日本公衆衛生雑誌、58(1)、30-39、2011

[学会発表] (計 3件)

- ① 横山美江、杉本昌子他：乳児から小学生の児をもつ母親の虐待認識に関する研究：母親の要因分析を中心に、第30回日本看護科学学会、2010年12月4日 札幌
- ② 横山美江、岡崎綾乃、杉本昌子他：乳児から小学生の子どもをもつ母親の虐待認識に関する研究、第69回日本公衆衛生学会総会、2010年10月28日 東京
- ③ 小林千夏、和田左江子、菌潤、横山美江：中学校を対象とした思春期性教育に関する取り組み、第68回日本公衆衛生学会総会、2009年10月22日 奈良

[その他]

ホームページ等

http://www.nurs.osaka-cu.ac.jp/chiiki_kango/

6. 研究組織

(1) 研究代表者

横山 美江 (Yokoyama Yoshie)

大阪市立大学・大学院・看護学研究科

研究者番号：50197688

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし

(4) 研究協力者

杉本昌子(研究生・保健師)

和田佐江子(保健師)

岡崎綾野(院生・保健師)

小林千夏(保健師)

藺潤(保健所長)

表1. 乳児から小学校の児をもつ母親の虐待認識の分析(横山美江他、2011より引用)

	0-1歳	2-3歳	4-5歳	6-7歳	8-12歳	P
	N (%)	N (%)	N (%)	N (%)	N (%)	
虐待認識 ¹⁾						
なし	400(86.2)	255(72.6)	252(71.2)	119(72.6)	80(75.5)	P<0.001
あり	64(13.8)	96(27.4)	102(28.8)	45(27.4)	26(24.5)	
虐待認識の内容 ²⁾						
感情的な言葉 ³⁾	32(50.0)	50(52.1)	70(68.6)	38(84.4)	18(69.2)	
叩くなど ³⁾	27(42.2)	44(45.8)	30(29.4)	14(31.1)	12(46.2)	
放置 ³⁾	6(9.4)	6(6.3)	5(4.9)	2(4.4)	1(5.0)	
振り回す ³⁾	1(1.6)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	
不明 ³⁾	7(10.9)	10(10.4)	6(5.9)	1(2.2)	2(7.7)	

1) 8歳以上12歳以下の児については対象者数が少なく、まとめて分析を行った

2) 複数回答あり

3) 虐待認識の内容は、各年齢における虐待認識ありを100%として算出した